

そして羽化2～7日後のものは、他の時期のものより死虫率低く、薬剤に対し抵抗力の大きいことがうかがえる。

榎田・橋爪⁵⁾はツマグロヨコバイ成虫に対するMIPC粉剤の殺虫速度を試験した結果、羽化5～7日後ごろが、またヒメトビウンカでは羽化4～6日後ごろが殺虫剤に対して感受性が低いと報告している。トビイロウンカの場合もほぼ同傾向がみられた。

従来昆虫は一般にオスよりメスのほうが薬剤に対する抵抗力が大きいことはすでによく知られウンカ・ヨコバイ類についても友永⁴⁾らをはじめ多くの研究がある。^{1,2)}トビ

イロウンカの場合もその例にもれず、また羽化後の経過日数に関係なくメスはオスより死虫速度が遅く、死虫率は低いようである。

さらに第1図は雌雄平均の生存率を示したものであるが、これをみると供試虫放飼3時間後の場合、苦悶虫を除いてもほぼ同様の曲線を示している。したがって苦悶虫は将来死亡するものとみなせば、生存率を示す場合、健全虫だけでも、あるいは苦悶虫を含めてもいずれでもよいものと考えられる。

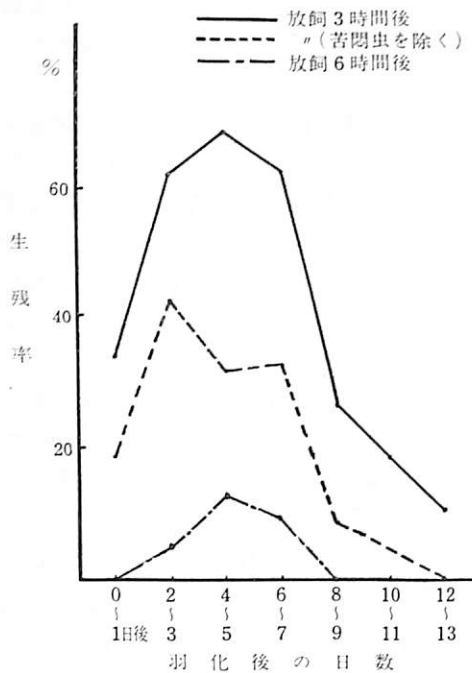
IV 摘 要

トビイロウンカ羽化後の日数と薬剤感受性の関係をNAC粉剤で検討した結果、羽化2～7日後ごろのものが生存率高く、羽化直後と経過日数8日以上のは死亡率が高かった。

またメスとオスではメスのほうが薬剤に対する抵抗力が大きかった。従って薬剤試験をおこなう場合は供試虫のage、性別などを考慮すべきであろう。

引用文献

- 1) 杉本達美・杉原収(1960) ツマグロヨコバイの性別薬剤抵抗性(予報), 北陸病虫害研究会報, 8:62~64.
- 2) 杉本達美(1961) 昆虫の性別薬剤抵抗性に関する研究, 北陸病虫害研究会報9:18~20.
- 3) 杉本達美(1967) トビイロウンカ卵の孵化条件に関する研究, 応動昆虫11, (2):76~78.
- 4) 友永富・ほか(1957) ツマグロヨコバイに対する殺虫剤と温度との関係, 北陸病虫害研究会報, 5:46
- 5) 榎田栄・橋爪文次(1968) 羽化後日数の異なるツマグロヨコバイ雌成虫に対するミブシン粉剤の殺虫速度比較試験, 全購連技術センター農薬研究部報告, 昭和43年度:165~168.



第1図 トビイロウンカ羽化後の経過日数と生存率の関係

ウンカが降る。!

昭和45年7月15日の体験は、長年の研究生活で始めて遭遇した驚異的なものであった。異常飛来という現象のすさまじさにキモをつぶした。福井県丹生郡織田町山中は従来ウンカ類の発生予察調査定点としてきたが、この日の状況は格別で、検診車の前面ガラスはウンカのため視界を失い、ワイパー使用でようやく運転できるほどであった。まだ定着前のため密蜂の巣箱をひっくりかえしたような有様。空中でも地上でもほとんど同数のウンカが掬取でき、舞い降りるといよりも降ってくるという感じである。異常飛来日は前日の14日だったらしい。15日は曇天で時々小雨であったが、25回往復50回振りて掬い取った虫数は、水田周辺部で500~1,000, 水田中央部で300~500, 畦畔雑草で100~150, 農道の雑草で100~150, 山林の雑草で200~300, 山林の雑木でも200~300,

林道や附近の雑草で100~200, 人家の庭で200であった。いずれも長翅型のセジロウンカ成虫で、そのほとんどが産卵前期のものでハネは無傷であった。引つづいて要点調査を行なった結果、山中—鎌坂—ミダ原—西田中—気比庄—コシキ谷—上北野にわたる沿線に、いずれも異常飛来が認められた。パールバック女史の著にでてくる飛蝗を思わせるような生物群集の大移動に圧倒された感じである。天日を覆って降ってくる小昆虫の群集暗幕を、くり返しては思いだし、いまでも1種不可思議な感動にかられている。別の調査をも合せて考えると、本県に発生するセジロウンカは、1部は土着虫であろうが大部分の群集は県外から異常するものではあるまいか。過去20年間の研究生活のなかで、はじめて遭遇した現実なので、ここに驚異とともに短報し、諸賢の参考に供したい。

(杉本達美)